

幼少児期における習い事に対する青年の評価

稲嶋 修一郎*
堀尾 良弘*

Adolescent evaluation of the learning in childhood

Shuichiro INASHIMA
Yoshihiro HORIO

キーワード：幼少児期, 習い事, 青年の評価
childhood, learning, adolescent evaluation

I. 緒 言

現在、少子化や複雑化が進む社会において、子どもの教育に対する期待はとて高い。幼少児期の子ども達にも、学校や園内教育以外に、運動・スポーツ、絵画、ピアノ、習字、そろばん等、様々な学びの場（以下、習い事）が用意されている。子どもの習い事に対して期待される効果や影響などについては、特別な知識や技術の習得、情操・認知面での発達、体力や精神面の鍛錬など多岐にわたっている^{1,2)}。最近では、習い事でのスポーツ活動や音楽系活動を通して、自己表現、自己制御、協調といった社会的スキルを発達させる可能性も示唆されている^{3,4)}。しかしながら一方では、幼少児期の習い事が、精神的、肉体的な負担になったり、親子、家族関係へのマイナス要因になると感じたりするなど、負の影響があることについても危惧されている^{5,6)}。

また、幼少児期の習い事の経験が、成長とともに本人に対しどのような影響をもたらすのかについては、検討されている数も少なく、統一した見解は得られていない⁷⁻⁹⁾。

さらに、習い事自体に関しても、サッカーやテニスなどスポーツに関するものや、絵画、音楽などの芸術に関するもの、あるいは英会話、習字やそろばん等々、数多くの種類が存在することや、習い事を受講することになった動機やきっかけ、1回の時間や頻度といった条件、心身にかかる負担、負荷量等も異なることから、その影響について単純に論じることは難しい。

これらのことを鑑み、本研究では、青年を対象とし、幼少児期での習い事の経験について、習い事を種別に分類し、習い事の実態やその影響について関連を検討することで、現在、成長した本人がどのように評価しているのか明らかにすることを目的とした。

II. 方 法

1. 対 象

2015年10月、A県の国公立K大学に通う学生を対象として、質問紙調査を実施した。800部配布し、763部

* 愛知県立大学教育福祉学部

を回収した（回収率95.4%）。このうち、質問に大幅な記入漏れや記入ミスのあったものを除いた757部のデータを分析対象とした。

2. 調査方法

無記名自記式質問紙調査とした。対象の学生に、調査実施者が直接配布、説明を行い、その場で回答してもらい、回収をした。調査用紙表面には、研究の目的、方法、調査実施者、倫理的配慮等を記載した。

3. 質問紙の構成

本研究で用いた質問項目は、先行研究^{1,5,6)}の質問項目、ならびに研究結果を参考に作成した。

なお本研究では、習い事は家庭外の教室で専門の講師の指導によるもの、学校教育では、習得できないものと定義し、学習塾については除外して検討した。

調査紙の内容として以下の項目を設定した（詳細は表1に示した）。

- (1) 属性：対象者の年齢、性別、学部
- (2) 習い事の実態（【問1】～【問6】）
- (3) 習い事による影響（【問7】～【問23】）
- (4) 習ってみたい習い事と選んだ理由（【問24】～【問30】）

それぞれの項目に対する回答方法は、(1)の属性、(2)習い事の実態：【問1】今までに経験した中で最も印象に残っている習い事、および(4)習ってみたい習い事と選んだ理由：【問24】習っていなかった習い事で、習ってみたいもの、については自由記述とし、(2)習い事の実態：【問2】～【問6】は、①～⑤に記述されている回答のうち最も当てはまる数字を、(3)習い事による影響：【問7】～【問23】および(4)習いたかった習い事と選んだ理由：【問25】～【問30】については、「1：全く当てはまらない」、「2：あまり当てはまらない」、「3：どちらでもない」、「4：少し当てはまる」、「5：とても当てはまる」とし、数字が大きくなるほど、より当てはまる度合いが増す、5件法で回答を求めた。

なお、得られたデータの集計および分析には、IBM SPSS Statistics（ver. 21）を使用した。

4. 倫理的配慮

調査を実施するにあたり、調査用紙表面に、回答が任意であること、研究の趣旨、調査結果を本研究以外には使用しないこと、質問に答えたくない場合には回答しなくても良いこと、質問紙の提出をもって調査協力の同意とみなすことを明記し、また配布時に口頭でも説明した。データには個人を特定できる情報は含まれていない。なお、本研究の調査は、日本臨床心理士会倫理規定及び同倫理綱領に準拠して実施した。

Ⅲ. 結果

1. 基本属性

対象者757名の年齢は18～21歳であり、平均年齢は 18.89 ± 1.03 歳（平均値±標準偏差）であった。

性別は、男性206名（27.0%）、女性551名（72.3%）であった。

所属学部は、外国語系学部325名（42.7%）、国文学部107名（14.0%）、教育福祉系学部116名（15.2%）、看護系学部66名（8.7%）、情報系学部142名（18.6%）であった。

性別および所属学部の比率は、概ねK大学全体の比率を反映するものであった。

2. 習い事の実態

① 習い事の有無（【問1】）

今までに何らかの習い事をしたことのある学生は698名（91.6%）、習い事を全くしたことのない学生は64名（8.4%）であった。

② 習い事の種類（【問1】）

10名以上と比較的回答の多かった習い事は、ピアノ156名、水泳111名、習字・書道89名、英会話・ECC62名、

表 1 質問項目

(1) 属性：年齢, 性別, 学部 (自由記述)

(2) 習い事の実態

【問 1】今までに経験した中で最も印象に残っている習い事を記入してください (自由記述)

【問 2】始めたきっかけは何ですか

① 自分がやりたかった ② 親のすすめ ③ 兄弟がやっていた ④ 友だちがやっていた ⑤ その他

【問 3】いつごろから習い始めましたか

① 0～3歳 ② 4～6歳 ③ 7～10歳 ④ 11～12歳 ⑤ 13歳以上

【問 4】何年ぐらい続けましたか

① 1年未満 ② 1～3年 ③ 4～5年 ④ 6～9年 ⑤ 10年以上

【問 5】習い事の1回の時間はどのくらいですか

① 30分未満 ② 30分～1時間 ③ 1時間～2時間 ④ 2時間～3時間 ⑤ 3時間以上

【問 6】どのぐらいの頻度で通っていましたか

① 週1回 ② 週2回 ③ 週3回 ④ 週4回 ⑤ 週5回以上

(3) 習い事による影響：「1：全く当てはまらない」「2：あまり当てはまらない」
「3：どちらでもない」「4：少し当てはまる」「5：とても当てはまる」で最も当てはまるものを選択

【問 7】技術・能力が身についた

【問 8】自分に自信が持てるようになった

【問 9】学生生活で役に立った

【問 10】友だちができた, 増えた

【問 11】体力がついた

【問 12】集中力がついた

【問 13】時間の使い方が上手くなった

【問 14】一つのことをやり通す粘り強さがついた

【問 15】興味が広がった

【問 16】家族とのコミュニケーションが増えた

【問 17】礼儀正しくなった

【問 18】練習が負担になった

【問 19】忙しくなった

【問 20】神経質になった

【問 21】周囲の人と比較するようになった

【問 22】期待が重く, プレッシャーを感じていた

【問 23】その習い事が好きになった

(4) 習いたかった習い事と選んだ理由：

【問 24】習っていなかった習い事で, 習ってみたかったものはありますか (1つ自由記述)

以下, 「1：全く当てはまらない」「2：あまり当てはまらない」「3：どちらでもない」
「4：少し当てはまる」「5：とても当てはまる」で最も当てはまるものを選択

【問 25】技術・能力を身につけたかったから

【問 26】習い事をしている子と差を感じたから

【問 27】学校生活で困ったから

【問 28】友だちを増やしたかったから

【問 29】興味・関心を幅広くしたかったから

【問 30】もっと体力をつけたかったから

そろばん29名, サッカー 24名, 空手18名, テニス15名, 電子オルガン13名, バレエ13名, 野球12名, 剣道10名であった。

少数の回答も含め, 得られた習い事の種類は全部で93であったが, これらをスポーツ系群(水泳, 球技, ダンス, 武道など), 芸術系群(造形, 絵画, 楽器など), 学習系群(語学, 習字, そろばんなど)の3群に分類した(表2: 順序不同)。3群の内訳は, スポーツ系群が284名(40.7%), 芸術系群が203名(29.1%), 学習系群が183名(26.8%)であった。

③ 習い始めたきっかけ (【問2】)

習い始めたきっかけは, 自分がやりたかった218名(31.2%), 親のすすめ288名(41.3%), 兄弟がやっていた108名(15.5%), 友だちがやっていた59名(8.5%), その他22名(3.2%)であった。

④ 習い始めた年齢 (【問3】)

習い事を始めた年齢は, 0～3歳が67名(9.6%), 4～6歳が279名(40.0%), 7～10歳が272名(39.0%), 11～12歳が54名(7.7%), 13歳以上が26名(3.7%)であり, 約9割(88.6%)が10歳までに習い事を始めていた。

⑤ 継続期間 (【問4】)

習い事の継続期間は, 1年未満が18名(2.6%), 1～3年が126名(18.1%), 4～5年が134名(19.2%), 6～9年が234名(33.5%), 10年以上が186名(26.6%)であった。約8割(79.3%)が, 4年以上に渡って習い事を継続していた。

⑥ 1回あたりの時間と週当たりの頻度 (【問5, 6】)

習い事1回あたりの時間は, 30分未満が3名(0.4%), 30分～1時間が239名(34.2%), 1時間～2時間が334名(47.9%), 2時間～3時間が80名(11.5%), 3時間以上が42名(6.0%)であった。

また, 週あたりの頻度は, 週1回が443名(63.5%), 週2回が172名(24.6%), 週3回が46名(6.6%), 週4回が11名(1.6%), 週5回以上が25名(3.6%)であった。

3. 習い事の実態と受けた影響の関連 (表3)

「習い事の実態」(【問3】習い事を始めた時期(年齢), 【問4】習い事を継続した年数, 【問5】習い事に費やす1回の時間, 【問6】1週間のうち習い事に通う頻度)と「習い事による影響」(【問7】～【問23】)には, どのよう

表2 習い事の種類と分類 (順序不同)

人(%)

スポーツ系群 n=284 (40.7)			芸術系群 n=203 (29.1)		学習系群 n=183(26.8)
水泳	ドッジボール	スキー	ピアノ	造形	そろばん
剣道	新体操	ハンドボール	ミュージカル	茶花道	英会話・ECC
バレエ	合気道	アルティメット	和太鼓	音楽	習字・書道
サッカー	器械体操	弓道	電子オルガン	茶道	日本語
バスケットボール	社交ダンス	スポーツ	琴	美術	中国語
バレーボール	スケート	殺陣	リトミック	花道	歴史
空手	フィギュアスケート	ソフトバレー	バイオリン	音楽教室	パソコン
卓球	フットサル	少年野球	絵画	三味線	将棋
ダンス	チアダンス	陸上競技	トロンボーン	弦楽器	あみもの
ソフトテニス	トランポリン	ゴルフ	日本舞踊	演劇	園芸
テニス	バドミントン	格闘技	合唱団	ボイストレーニング	ビーズ教室
武術	スポーツクラブ	柔道	フルート	油絵	韓国語
少林寺拳法	乗馬	テコンドー	ギター	金管楽器	
野球	スピードスケート	フラダンス	太鼓	歌	
			トランペット	ドラム	

な関連があるのか調べるため、これら相互の相関係数を算出した。本研究では、有意なp値が認められた項目で、相関係数が±0.20以上の値が認められたものを相関ありとみなした(表3)。

その結果、【問3】習い事を始めた時期(年齢)と「習い事による影響」(【問7】～【問23】)の間にはいずれも有意な相関関係が認められなかった。

しかしながら、【問4】習い事の継続年数,においては、【問8】自分に自信が持てるようになった、【問12】集中力がついた、【問14】一つのことをやり通す粘り強さがついた、【問23】その習い事が好きになった、との間にそれぞれ正の相関関係が観察された。さらに、【問5】1回あたりの習い事の時間,においては、【問10】友だちができた、増えた、【問11】体力がついた、【問12】

集中力がついた、【問17】礼儀正しくなった、との間に正の相関関係が認められた。これらに加え、【問6】習い事に通う1週間あたりの頻度,においては、【問10】友だちができた、増えた、【問11】体力がついた、【問12】集中力がついた、【問17】礼儀正しくなった、【問19】忙しくなった、【問22】期待が重く、プレッシャーを感じていた、との間でそれぞれ有意な正の相関関係が確認された。

4. 習い事による影響と3つの分類(スポーツ系群, 芸術系群, 学習系群)の関係(図1)

「習い事による影響」(【問7】～【問23】)は、本研究で行った3つの分類(スポーツ系群, 芸術系群, 学習系

表3 習い事の実態と受けた影響の相関

	問3(始めた時期)	問4(継続年数)	問5(1回の時間)	問6(週当たりの頻度)
問8(自分に自信)	-	.225 **	-	-
問10(友だちができた, 増えた)	-	-	.263 **	.248 **
問11(体力がついた)	-	-	.298 **	.266 **
問12(集中力がついた)	-	.221 **	.215 **	.200 **
問14(粘り強さがついた)	-	.265 **	-	-
問17(礼儀正しくなった)	-	-	.296 **	.217 **
問19(忙しくなった)	-	-	-	.274 **
問22(プレッシャーを感じていた)	-	-	-	.241 **
問23(その習い事が好きになった)	-	.234**	-	-

** p < .01

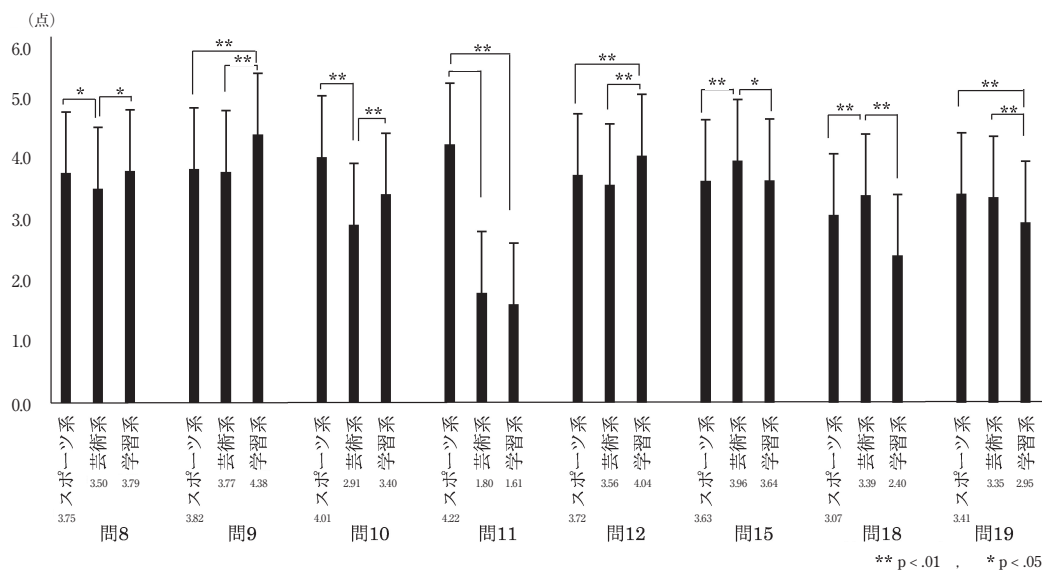


図1 習い事による影響と3つの分類(スポーツ系群, 芸術系群, 学習系群)の関係

群)間で異なるのかを明らかにするため、【問7】～【問23】の各問と3群間で分散分析を行った。有意な差が認められた項目について、さらに多重比較を行った。

有意な差異が確認されたものについて、図1に結果を示した。

スポーツ系群では、他の2群と比較して、低値を示した項目は無く、【問11】体力がついた、の1項目において高値が確認された。

芸術系群は他の2群と比較すると、【問8】自分に自信を持てるようになった、【問10】友達ができた、増えた、の2項目において低値を示し、一方、【問15】興味が広がった、【問18】練習が負担になった、の2項目においてそれぞれ高値を示した。

学習系群については、他の2群と比較して、【問19】忙しくなった、の1項目において低値が認められ、【問9】学生生活で役に立った、【問12】集中力がついた、の2項目においてそれぞれ高値であった。

5. 習いたかった習い事について

① 習いたかった習い事の有無

【問24】において、子どもの頃に習っていなかったが、習ってみたい習い事があると回答した者は、習い事経験のある698名のうち349名(50.0%)であり、他に習いたかった習い事がないと回答した者は311名

(44.6%)、未記入が38名(5.4%)であった。他に習い事をしてみたいかかったという回答のうち、スポーツ系群に属する種目を回答した者が155名(44.4%)、芸術系群の種目を回答した者が115名(33.0%)、学習系群の種目を答えた者が79名(22.6%)、その他の回答が1名(0.3%)であった。

また、【問1】において、習い事の経験がないと回答した61名のうち、【問24】で習いたかった習い事があったと回答した者は28名(45.9%)、ないと回答した者は31名(50.8%)、未記入が2名(3.3%)であった。種目を回答した28名の内訳は、スポーツ系群が6名(21.4%)、芸術系群が14名(50.0%)、学習系群が7名(25.0%)、その他が1名(3.6%)であった。

② 習いたかった習い事の種類(スポーツ系群, 芸術系群, 学習系群)と選んだ理由との関係(図2)

【問24】で回答された、習いたかった習い事の3つの分類(スポーツ系群, 芸術系群, 学習系群)間において、「選んだ理由」(【問25】～【問30】)に差異が認められるのかを明らかにするため、【問25】～【問30】の各問と3群間で分散分析を行った。有意な差が認められた項目について、さらに多重比較を行った。

有意な差異が確認されたものについて、図2に結果を示した。

スポーツ系群は、他の2群と比較して低値を示した項

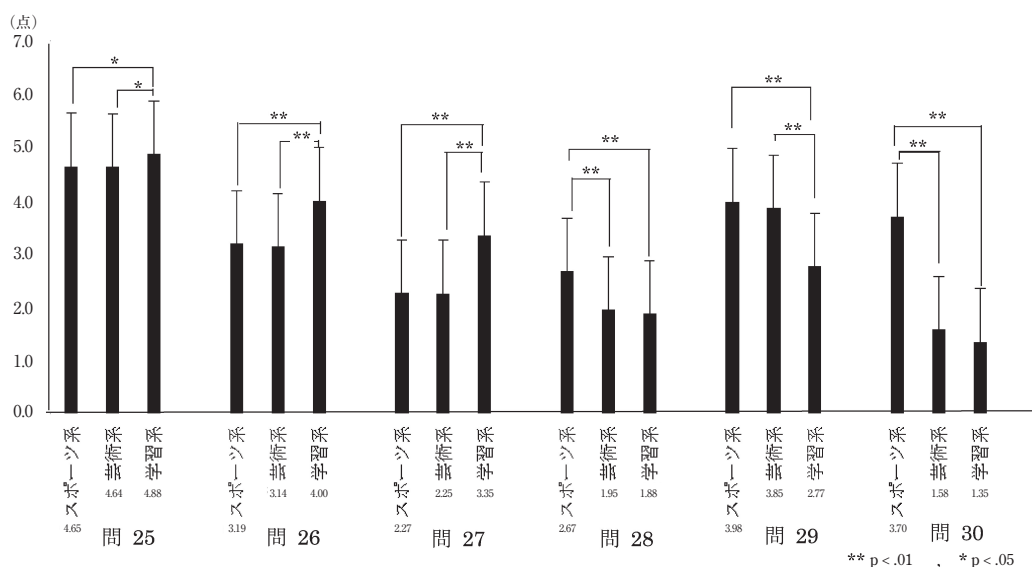


図2 習いたかった習い事の種類(スポーツ系群, 芸術系群, 学習系群)と選んだ理由との関係

目は無く、【問28】友だちを増やしたかったから、および【問30】もっと体力をつけたかったから、の2項目においてそれぞれ高値が認められた。

芸術系群は他の2群と比較して、低値および高値を示した項目はいずれも無かった。

学習系群は、他の2群と比較して、【問29】興味・関心を幅広くしたかったから、の項目において低値を示し、【問25】技術・能力を身につけたかったから、【問26】習い事をしている子と差を感じたから、【問27】学校生活で困ったから、の各項目においてそれぞれ高値を示した。

③ 習っていた種目分類と習いたかった種目分類との関連 (表4)

習い事の経験種目の違いによって、他に習いたかった習い事の種類の分類の違いが出るかを検討するために、【問1】の「習っていた種目の3分類」と、【問24】の「習ってみたかった習い事の3分類」について、 χ^2 検定および残差分析を行った(表4)。

その結果、習っていた種目分類(スポーツ系群、芸術系群、学習系群)と習いたかった種目分類(スポーツ系群、芸術系群、学習系群)のそれぞれにおいて関連がみられた(表4)。スポーツ系群の習い事を習っていた者は、芸術系群の習い事を習っていた者と比べて、習いたかった種目分類としてスポーツ系群を選択する割合が低かった。また、芸術系群の習い事を習っていた者は、他の2群(スポーツ系群と学習系群)の習い事を習っていた者と比べて、習いたかった種目分類として芸術系群を選択する割合が低値であった。さらに、学習系群の習い事を習っていた者は、芸術系群の習い事を習っていた者と比べて、習いたかった種目分類として学習系群を選択する割合が低くなっていた。

IV. 考 察

習い事の実態と受けた影響について

本調査において、習い事の実態と影響との間でいくつかの相関関係が認められた(表3)。習い事の継続年数(【問4】)は、自分に自信を持てるようになった(【問8】)、集中力がついた(【問12】)、粘り強さがついた(【問14】)、その習い事が好きになった(【問23】)、の項目との間にそれぞれ有意な正の相関が確認された。また、習い事の1回の時間(【問5】)と週あたりの頻度(【問6】)の結果は類似しており、友達ができた、増えた(【問10】)、体力がついた(【問11】)、集中力がついた(【問12】)、礼儀正しくなった(【問17】)、の項目についてそれぞれ正の相関が認められた。これらのことから、習い事を習うことは、上述の各項目においてポジティブな影響を及ぼす可能性が示唆された。しかしながら、週あたりの頻度(【問6】)については、忙しくなった(【問19】)、期待が重く、プレッシャーを感じていた(【問22】)、の項目にも正の相関が認められたことから、週あたりの頻度が増えることによって習い事が負担になる可能性があることが明らかとなった。いくつかの先行研究においても、習い事に代表される早期教育には、良い影響が期待されるが、その量や質によっては弊害が生じる可能性があることが指摘されている^{3,10)}。

本調査では、習い事による影響と3つの分類(スポーツ系群、芸術系群、学習系群)の関係において、各分類において特徴的な結果が得られた(図1)。

まず、スポーツ系群では、体力がついた(【問11】)の1項目において他の2群と比べ高値であった。

次に、芸術系群では、良い影響と思われたのは、他

表4 習っていた種目分類と習いたかった種目分類との関連

習っていた種目分類	習いたかった種目分類			人(%) χ^2
	スポーツ系群 n=139(100)	芸術系群 n=99(100)	学習系群 n=102(100)	
スポーツ系群	55(39.6)	52(52.5)	44(43.1)	*
芸術系群	53(38.1)	18(18.2)	40(39.2)	*
学習系群	31(22.3)	29(29.3)	18(17.6)	*

*p < 0.05

の2群と比較し、興味が広がった（【問15】）項目の値が高かったことである。一方、懸念される影響と思われる結果として、他の2群と比べると、自分に自信が持てるようになった（【問8】）、友達ができた、増えた（【問10】）、の2項目において低値であったこと、さらに、練習が負担になった（【問18】）、での項目値が高かったことである。

学習系群では、他の2群と比べ、学生生活で役に立った（【問9】）、集中力がついた（【問12】）、の2項目が高値を示し、忙しくなった（【問19】）項目が低値であったことは、良い影響であると思われた。

スポーツ系群や芸術系群において技術の習得は、多くの研鑽や時間が必要とされることから、学習系群と比べると忙しく感じやすいこと、さらに、芸術系群では、親の金銭や送り迎えなどの負担^{2,5,9)}なども加わって、懸念される影響が増えた可能性が考えられた。

習いたかった習い事について

興味・関心を幅広くしたかったから（【問29】）、の項目において、スポーツ系群と芸術系群の値は、学習系群と比較して高かった（図2）。

また、スポーツ系群では、他の2群と比べ、友達を増やしたかったから（【問28】）、もっと体力をつけたかったから（【問30】）、の2項目において高値を示した。みんなで身体を動かして活動するといったスポーツが持つポジティブな印象がこれらの結果につながったのかもしれない。

学習系群では、他の2群と比べ、技術・能力を身につけたかったから（【問25】）、習い事をしている子と差を感じたから（【問26】）、学校生活で困ったから（【問27】）、の各項目で高値を示した。これらの結果は、青年の実際の経験に基づいた現実的な考えが、反映されているのかもしれない。

表4の結果から、習いたかった種目分類において、自分が習っていた種目分類と同じ系群を選択しない傾向が認められたが、特に芸術系群（18.2%）は、その傾向が顕著であった。その代わりに芸術系群はスポーツ系群の種目を希望する割合が高い（52.5%）ことが明らかとなった。

本研究の課題

本研究の課題は、調査対象が一地域の一大学であった点である。習い事への参加は、地域性が強く影響している可能性があること、さらに一大学の調査では、調査結果をもって一般化するには限界がある。また、今回は男女の比率に偏りが見られたこと、男女のデータを合算して分析したが、性差が存在する可能性があることなどから、これらの可能性を考慮して詳細な調査を進める必要がある。

以上、本研究では、1. 習い事の実態（継続年数、1回の時間、通う頻度）と習い事による影響、2. 習い事による影響と3つの分類（スポーツ系群、芸術系群、学習系群）の関係、3. 習いたかった習い事の分類（スポーツ系群、芸術系群、学習系群）とその理由との関係、4. 習っていた種目分類と習いたかった種目分類との関係、のそれぞれにおいて興味深い関連があることが明らかとなった。

これらのことから、幼少児期の習い事を選ぶ際は、本研究で得られた、幼少児期における習い事に対する青年評価の傾向も参考にし、種目選択や、実態等の条件を考慮することが望ましいと考えられた。

参考文献

- 1) 中山南海子, 栗原武志, 森博文. 習い事へ子どもを通わせる親の意識に関する研究. 京都女子大学発達教育学部紀要. 2005; 1: 93-104.
- 2) 末永雅子. 親が習い事に求めるもの—ピアノを習わせている親への調査に基づいて—. 広島文化学園大学学芸学部紀要. 2013; (3): 9-17.
- 3) 細川陸也, 桂敏樹, 志澤美保. 就学前のスポーツ活動・文化芸術活動と社会的スキルの発達との関連. 小児保健研究. 2016; 75 (1): 54-62.
- 4) Ahrl S, Fedewa AL. A meta-analysis of the relationship between children's physical activity and mental health. *Journal of Pediatric Psychology*. 2011; 36 (4): 385-397.
- 5) 伊藤葉子, 鳥原葉穂子. 習いごとに対する親の意識. 千葉大学教育学部研究紀要. I, 教育科学編. 2000; 48: 111-122.
- 6) 成田朋子. 早期教育のあり方について考える: 保育科学生とその保護者への習い事についての回想調査に基づいて. 名古屋柳城短期大学研究紀要. 2013; 35: 89-103.
- 7) 萩原英敏, 山内弥子. 子どもの時期の習い事に対する青年期

- の評価：その1 子どもと親の評価の差を中心に。淑徳短期大学研究紀要。2002; 41: 43-82.
- 8) 萩原英敏. 子どもの時期の習い事に対する青年期の評価：その2 習い事別の項目間の関係を中心に。淑徳短期大学研究紀要。2003; 42: 49-65.
- 9) 梅崎高行. 青年期の有能感と自己決定感に及ぼす子ども期の習い事経験—家族のサポートによる調整効果—. 甲南女子大学研究紀要, 人間科学編. 2017; 53: 37-46.
- 10) Camilli G, Vargas S, Ryan S, et al. Meta-analysis of the effects of early education interventions on cognitive and social development. Teachers College Record. 2010; 112 (3): 579-620.